

Commentaries of “Suou no naishi shu” (5)

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ONO, Junko メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24517/00069053 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



『周防内侍集』注釈(五)

大野 順子

Commentaries of "Suou no naitshi shu" (5)

Junko ONO

39 院の局に、つねに相住みなる人の出でたるほどに参りてみれば、母屋の御簾に葵の枯れてかかりたるに書きつけし
かくれども甲斐なきものはもろともにみすのあふひのかれはなりけり

【底本】

院のつほねにつねにあひすみなる人のいてたるほどにまいりてみればもやのみすにあふひのかれてかかりたるにかきつけし
かくれどもかひなきものはもろともにみすのあふひのかれはなりけり

【他出】

○『徒然草』一三八段

「祭過ぎぬれば、のちの葵不用なり」とて、ある人の、御簾なるを皆取らせられ侍りしが色もなく覚え侍りしを、よき人のし給ふ事なればさるべきにやと思ひしかど、周防内侍が、

かくれどもかひなき物はもろともにみすの葵の枯葉なりけり

と詠めるも、母屋の御簾に葵のかかりたる枯葉を詠めるよし、家の集に書けり。古き歌の詞書に「枯れたる葵にさして遣はし

ける」とも侍り。枕草子にも「来しかた恋しき物、枯れたる葵」と書けるこそ、いみじくなつかしう思ひ寄りたれ。鴨長明が四季の物語にも「玉垂に後の葵は留まりけり」とぞ書ける。おのれと枯るるだにこそあるを名残なく、いかが取り捨つべき。御帳にかかれる薬玉も、九月九日菊に取り換へらるるといへば、菖蒲は菊の折までもあるべきにこそ。枇杷皇太后宮かくれ給ひて後、古き御帳の内に、菖蒲、薬玉などの枯れたるが侍りけるを見て「折ならぬ根をなほぞかけつる」と弁の乳母の言へる返事に、「あやめの草はありながら」とも江侍従が詠みしぞかし。

○『前撰政家歌合』夏逢恋・百九十一番判詞

百九十一番 左 持純

今夜こそみすのあふひをしるべにてかけけるよよの契をも知れ

右 近衛

夏引の手引きの糸のよるも逢ふはほどなく明くる東雲

左歌は周防内侍、「かくれども甲斐なきものはもろともにみすのあふひのかれはなりけり」と詠ざるを思ひつるにや、ただし「しるべ」と「知れ」と言へる詞同じ心にや、右歌、又聞きふるせる姿に侍り、なずらへて持とせ

り

【通釈】

御所の局へ、いつも同じ部屋に暮らしている人が出かけているところに参上してみると、母屋の御簾に枯れた葵がかかっているので書きつけました。

かけても甲斐がないものは、あなたと一緒に見ることもなかった御簾の葵の枯れ葉ですね。

【参考歌】

早うもの申しける女に、枯れたる葵をみあれの日つかはしける
実方朝臣

いにしへのあふひと人は咎むともなほそのかみの今日ぞ忘れぬ
返し 読人しらず

① かれにけるあふひのみこそ悲しけれあはれと見ずや賀茂の瑞垣

（新古今集・恋四・一二五四／二二五五）

枯れたる葵を包みて、経方、小式部に

② かれにけるあふひなれども人知れぬ心にはなをかけぬ間ぞなき

「返して」とあれば

ほどもなくかると見るにもあふひ草名をだにかけて聞かじとぞ思ふ

（四条宮下野集・一七四／一七五）

③ いにしへのあふひもかれぬ玉簾なにを形見にかけてしのばむ

（範宗集・五〇〇）

④ かざせどもかひなき物は己が引くしめの外なるあふひなりけり

（和泉式部続集・三四四）

⑤ 叩けどもかひなきものは夏の夜の人待つ宿の水鶏なりけり

（江帥集・六九）

物に籠もることのありしに、「出でてのちに言はむ」と頼めたりし女に音せざりしかば、女のもとより

しめのうちを出でばと言ひし言の葉は忘れ草とや今はなりぬる

返し

⑥ もろともに契りしことは忘れねど今日のあふひの猶ぞ待ちつる

かくてその夜さり行きたり、みあれの日にて、かく言ひしなり
（実家集・三〇三／三〇四）

【語釈】

○院の局に、つねに相住みなる人の出でたるほどに参りてみれば：いつも一緒に部屋で過ごしている人が不在のところに戻ってきた折のこと。「院」は上皇・女院などの御所や、高貴な人の邸宅、寺などを指す。本集は白河天皇の御代のできごとを基本線として詞書が書かれているので、ここでの「院」は、白河天皇在位中の御所である大内裏もしくは里内裏を、家集編纂時点から振り返って記述したものとみておく。「局」は部屋のこと、ここでは周防内侍と「つねに相住みなる人」のために御所のなかに割り当てられていた居室を指す。「つねに相住みなる人」は、周防内侍の朋輩の女房と考えられるが誰であるかは不明。○母屋の御簾に葵の枯れてかかりたるに書きつけし：「母屋」は、寝殿造りの邸宅の、廂の内側にある部屋のこと。「葵」は三七番【語釈】参照。『枕草子』の「過ぎにしきた恋しきもの」では「枯れた葵」を、過ぎ去った時を慕わしく思い起こさせるものとする。【補説】参照。「枯れ」た「葵」にことよせて、今は「離れ」て「逢う日」もない人との恋について歌った①や②が残る。「寄簾恋」題で詠まれた③でも枯れた葵に、すでに終わった恋を重ねている。○かくれども甲斐なきものは：葵をかけるに、相手に心かけることが重ねられている。あなたは御獄にいて逢えないので、賀茂祭の日に葵をかざしても甲斐がないと詠じた④は、本詠と構成が近い。このほか構成の似ている歌に、来ぬ人待つ家では水鳥が来訪を告げるように鳴いても甲斐がないと詠じた⑤がある。○もろともにみすのあふひのかれはなりけり：「もろともに」には「諸葛」が響いている。「諸葛」は「双葉葵」の異称であるほか、

葵と桂を組み合わせた飾りも指す。諸葛の飾りは、賀茂祭のときに簾や柱に掛けたり頭にかざすもの。「御簾」と「見ず」が掛詞。「葵」に「逢ふ日」「枯れ」に「離れ」が響いていて、葵をかける「逢ふ日」の葵をとに見ることなく、あなたと「離れ」ていると嘆く。⑥では、返歌をしたのが「みあれの日」であったことから、「逢う日」となる今日の「葵」を待っていたので遅くなったと言いつつ諷している。

【補説】

『徒然草』一三八段で、兼好は「枯れたる葵」を要不要だけでさつと捨て去つてよいものではないとして、周防内侍詠とともに『枕草子』を引用している。

過ぎにしかた恋しきもの、枯れたる葵。雛遊びの調度。二藍、葡萄染などのさいでの押しへされて、草子の中などにありける、見つけたる。また、をりからあはれなりし人の文、雨など降りつれづれなる日、さがし出でたる。去年の蝙蝠。

〔枕草子〕

昔を懐かしみ愛おしく思うものを重ねていくなかで、「枯れたる葵」が最初にあげられている。これに続けて、子供のころに遊んだ雛遊びの道具や、心躍らせつつ読んだ物語の葉として挟んだ二藍、葡萄染の色彩——思い出の愛おしさに顔が綻ぶような品々が連なっていて、「枯れたる葵」は単なる不用品ではない。

参考歌にあげた「枯れたる葵」に添えた歌々で、実方は「なほそのかみの今日ぞ忘れぬ」と歌い、経方は「心にはなをかけぬ間ぞなき」と忘れえぬ心のうちを訴えている。眼前の「枯れたる葵」に、葵が瑞々しくあつた頃を重ねて思い出を愛おしむ感覚は、『徒然草』に至るまでおおよそすべての用例に共通している。

本詠でも枯れた葵の葉にかつてと過ごした葵祭の日を愛おしく重ねつつ、今年の葵もあなたと見たかったと惜しんでいる。

返し

40 甲斐なしと思ひもかれずあふひ草心をかけぬ折しなれば

【底本】

返し

かひなしとおもひもかれすあふひくさ心をかけぬをりしなれば

【通釈】

(つねに相住みの人の) 返歌。

(かけても) 甲斐がないと(あなたへの) 思いは途絶えませんよ。(あなたに逢う日をもって) 葵草にずつと心をかけていたので。

【参考歌】

①かひなしと思ひな消ちそ水茎のあとぞ千歳の形見ともなる

(古今和歌六帖・ふみ・三三七九)

②八重葎繁き思ひにとちはてし跡をばかれず秋は来にけり

(土御門院御集・草名十首・三二三)

③かれにけるあふひなれども人知れぬ心にはなをかけぬ間ぞなき

(四条宮下野集・一七四)

④そのかみに心をかけしあふひ草今日のみあれにかざしつるかな

(前長門守時朝入京田舎打聞集・四八)

⑤鳴く雁の音をのみぞ鳴く小倉山霧たち晴るる折しなれば

(古今和歌六帖・雁・四三七八)

⑥身にそへる影とこそ見れ秋の月袖にうつらぬ折しなれば

(新古今集・秋上・四一〇・相模)

【語釈】

○返し：返歌は、三九番歌の詞書きに見える「つねに相住みの人」がした。○甲斐なしと：贈歌の第二句を受けたもの。同じ初句を持つ①は、筆あとを価値がないものだと思つて消すなど歌う。○思ひもかれず：葵は「枯れ」でも、あなたへの思いまでも「離れる」ということはないと思つて返している。「枯れ」は「葵」の縁語。二句切れ。

②は、物思いのままに八重葎がすっかり茂ってしまったところへ秋がきたとする。三九番【参考歌】にもあげた③は、枯れた葵を贈りつつ、なかなかお目に掛かる機会はないけれどいつもあなたを思っていると歌っていて、本詠と発想が近い。○あふひ草心をかけぬ折しなれば：「逢ふ日」と「葵」を掛ける。「かけぬ」は「葵」の縁語。後代には、葵にこと寄せて神代の昔を慕う心を詠んだ④がある。「し折しなければ」は、「いつもししない」「ししないままでいる」こと。「折しなければ」の先行例として、霧がかかって晴れないままなので雁の声だけが聞こえると歌う⑤や、秋の月が涙に濡れた袖に映らないときはないことを歌う⑥がある。

【補説】

枯れた葵をあいだに置いて、局を分け合う朋輩と贈答を行っている。たがいに相手を心にかける歌を贈りあうあたりから一五・一六番の贈答歌で、大盤所から周防内侍に歌を詠み送ってきた人が、この「つねに相住みなる人」だったのでないかと想像を逞しくしたくなる。

里にて、おとなき郭公の参るまに、気近き声の聞こえしかば

41 郭公ひまなく鳴くをいかなれば君しも聞かぬ五月なるらん

【底本】

さとにておとなき郭公のまいるまにけちかきこゑのきこえし

かは

ほととぎすひまなくをいかなればきみしもきかぬさ月なるらん

【通釈】

里で、音沙汰のない郭公がやって来るなり、間近から声が聞こえましたので。

郭公はひっきりなしに鳴くのに、どうしてあなたに限って（音信を）

聞かない五月なのでしょうか。

【参考歌】

大輔につかはしける 左大臣

①今は早み山を出でて郭公気近き声を我に聞かせよ

返し

人はいさみ山がくれの郭公ならはぬ里は住み憂かるべし

（後撰集・恋五・九五〇／九五二）

卯月ばかり、友だちの住み侍りけるころ近く侍りて、かな

らず消息遣はしてむと待ちけるに音なく侍りければ

②郭公来ある垣根は近ながら待ち遠にのみ声の聞こえぬ

（後撰集・夏・二四九・よみ人知らず）

③郭公いたくな鳴きそひとりゐていのねられぬに聞けば苦しも

（拾遺集・夏・二二〇・大伴坂上郎女）

④篝火にあらぬ思ひのいかなれば涙の河にうきて燃ゆらん

（後撰集・恋四・八六九・よみ人知らず）

比叡の山に相知りたる僧の、「里へ出でばかならずおとせん」と契り侍りけるに、出でながらおとせず侍りければ、四月十

日頃に遣はしける 祝部成仲

⑤里なるる山郭公いかなれば待つ宿にしもおとせざるらむ

（風雅集・夏・三三五）

⑥五月待つ山郭公うちはぶき今も鳴かなむ去年のふる声

（古今集・夏・一三七・よみ人知らず）

⑦郭公鳴くや五月のあやめ草あやめも知らぬ恋もするかな

（古今集・恋一・四六九・よみ人知らず）

【語釈】

○里にて、おとなき郭公の参るまに、気近き声の聞こえしかば：周防内侍は内侍として御所にいるのが通常なので、「里」は「内裏」に対する自邸のこと。里下がりの女房の邸に、恋人や知人が訪ね

てくることは『枕草子』等にしばしばみられる。本詠が誰かに送られた歌であるのか、心のうちを吐露した独詠であるのかは不明。「音なし」は消息や訪れがないさまを示す。ここでは、訪れる気配もなかった郭公が、邸に舞い降りるや高らかに声を上げたようすを、「音なき郭公」と「気近き声」のコントラストで効果的に描写している。「郭公」は二番【語釈】参照。「気近き声」は郭公との距離感を示すとともに、歌に示される「君」との心理的な距離感も引き出す。郭公の「気近き声」の先行例となる①は、家集の詞書に「中北の方うちへのみものしたまへば」（清慎公集・四三）とあり、実頼が大内山（＝内裏）に仕える妻を郭公に喩えて、里下がりして傍でうち解けた声を聞かせてくれないことを恨んだのに対し、妻の大輔は里居はつらいと返している。②は、郭公が「近くにいるのに声は待ち「遠」しいものであることに重ねて、音信のない友人への恨みを歌う。○郭公ひまなく鳴くを：『万葉集』にもおさめられている③では、郭公がしきりになく声に独り寝の辛さを募らせる。同じく一人で郭公の声を聞いている本詠は、こうした感覚の延長上にある。○いかなれば：「いかなれば：らん」という句の形はしばしばみられ、「〜」で提示された状態がいつたいうわけだ。「…」の示すような状況になるのだろうかと問いかける。④は篝火ならぬ私の思いの「火」はどうして涙川に浮かぶのかと女を恨む。⑤では、比叡山を下りた知人を、初夏のこととて里に馴染んだ山郭公に見立て、連絡がないのはなぜかと歌う。○君しも聞かぬ五月なるらん：郭公は夏になると鳴く鳥と捉えられていて、⑥や⑦に見えるように、郭公と五月がしばしば取りあわせられる。「音」なき郭公も来て声を聞かせてくれる五月だというのに、よりにもよってあなたの「音」がないとは……、と歌うことで、里で過ぐす周防内侍のもとに音信のない人を怨んでみせた。

【補説】

本詠までが夏歌。惜春から初夏へと夏の深まりを示す配列となっている。

42 稲荷の行幸に、杉のなかに色濃き紅葉の見えしかば
稲荷山すぎまの紅葉きてみればただ青地なる錦なりけり

【底本】

いなりの行幸にすぎのなかにいろこきもみちのみえしかば
いなり山すぎまのもみちきてみればたゝあをはなるにしきなりけり

【他出】

○『夫木和歌抄』秋六・六二六二

稲荷行幸時 周防内侍

稲荷山すぎまの紅葉来てみればただ青地なる錦なりけり

【通釈】

稲荷大社への行幸（に供奉したとき）に、杉のなかに濃く色づいた紅葉が見えたので。

稲荷山の杉のあいだを行き過ぎるうちに紅葉を見ると、まるで青地に織った錦（のよう）ですよ。

【参考歌】

①稲荷山尾の上にたてるすぎすぎにゆきかふ人の絶えぬ今日かな
（源順集・一六八）

②神山のすぎまの紅葉露霜に秋のしるしぞよそに見えける
（為家五社百首・紅葉・日吉・三七六）

③時雨する稲荷の山の紅葉葉は青かりしより思ひそめてき（古今著聞集・和泉式部田刈る童に襖を借る事並びに同童式部に歌を贈る事・一六四・田刈りける童）

④秋山の紅葉の錦織り残す絶え間は松の青地なりけり
（治承二年右大臣家百首・一四七・藤原頼輔）

⑤松が枝にかゝれる蔦の紅葉こそ青地に織れる錦なりけり

（治承二年右大臣家百首・一五八・藤原経家）

廿一日、八つ橋を出でて行く。日いとよく晴れたり。山もと遠き原野を分け行く。昼つかたになりて、紅葉いと多き山に向ひて行く。風につれなき紅、ところどころ朽葉に染めかへてける、常磐木どもも立ちまじりて、青地の錦見る心地して。人に問へば宮路の山とぞ言ふ。

⑥ 時雨けり染むる千しほのはては又紅葉の錦色変へるまで

（十六夜日記・三二）

⑦ 不堪紅葉青苔地

（和漢朗詠集・紅葉・三〇一・白楽天）

【語釈】

○稲荷の行幸に…「稲荷」は、京都市伏見区の稲荷山西麓にある稲荷大社のこと。山城国の歌枕。『山城国風土記』によれば、稲荷社ははじめ稲荷山山頂の三ヶ峰に鎮座して、上中下の三社があった。

二月の初午の日に、稲荷大社の神木である「しるしの杉」（杉の小枝）をいただいて祈ることから、しばしば「杉」とともに詠まれる。「行幸」は天皇が外出すること。本詠の稲荷行幸が、どの天皇の御代のことであるか不明。【補説】参照。○杉のなかに色濃き紅葉の見えしかば…常緑の杉の木にあいだに、紅葉した木々が点在するようすを表現。○稲荷山…「稲荷山」は三ヶ峰と通称されて、山全体が稲荷信仰の対象となっている。歌枕として『能因歌枕』や『和歌初学抄』、『八雲御抄』などに取りあげられている。『和歌初学抄』には「神マス、スギアリ」との記述があり、杉と詠まれることが多かった。『奥義抄』等で三輪明神の御歌ともいわれる古今集歌（雑下・九八二・よみ人知らず）のように、三輪や稲荷の杉は神とかかわって和歌に詠まれた。『枕草子』の「うらやましげなるもの」には稲荷参詣のようすが描かれている。○すぎまの紅葉きてみれば…「過ぎ」と「杉」の掛詞。同じ掛詞を用いた①は、二月の初午の日の稲荷詣での参詣者が途切れることなく杉の間を山を行き交っていることを歌う。後代

には、神山を過ぎゆくときに杉の間の紅葉を詠んだ②がある。「稲荷」と「紅葉」を歌で詠みあわせた例としては『袋草紙』・『十訓抄』などにも採録された③があるものの、用例は多くない。「着て」は「錦」の縁語。○ただ青地なる錦なりけり…「あをば」を見せ消ちで「あをち」に訂正。常緑の杉がご神木となる稲荷山では、杉の青地に、赤や黄に色づいた紅葉の模様が織り込まれているように見えると見立てている。「錦」は、金糸や銀糸などさまざまな色糸を用いて華やかな文様を織り出した布のこと。平安時代になると「花の錦」や「紅葉の錦」などというように、春や秋の華麗な景色を喩えるときに用いられた。院政期以後は秋の紅葉を歌う例が多い。ただし、常緑が主体となった紅葉の山を詠む例は、本詠以前には残らない。「青地」の錦は本詠以降にも用例が少ない。近いところでは「治承二年右大臣家百首」の④や⑤があり、制作年次から本詠に学んだ可能性が高い。『十六夜日記』では、⑥の宮路山を行き過ぎる場面で、紅葉のあいだに常磐木が混じっているさまを描写する際に「青地の錦」が用いられている。⑦の著名な詩句には、青い苔の上に紅葉が散ったようすが歌われている。周防内侍はこのあたりから表現を学んだか。

【補説】

天皇の「御願」祭祀として、神社への行幸が行われる画期が円融朝あたりであり、そこから「後三条朝にかけて神社御幸十社制が成立・展開を遂げ、代始儀式の一環となり定例化が進む」との指摘（岡田莊司『平安時代の国家と祭祀』続群書類従完成会、一九九六年一月）がある。この十社のなかに稲荷社が加わえられるのが後三条天皇のときで、延久四年（一〇七二）三月二十六日に稲荷・祇園両社への行幸が初めて行われた（『百鍊抄』ほか）。以降、白河天皇が承暦元年（一〇七七）二月一日（『水左記』ほか）、堀河天皇が寛治五年（一〇九一）七月三日・一〇月三日（『後二条師通記』・『中右記』ほか）に行幸を行っており、周防内侍が宮廷に仕えている間に四回

の記録が残る。実景の和歌に紅葉が詠みこまれる可能性があるのは秋か冬と考えられるので、本詠は白河天皇か堀河天皇の行幸の折りに出詠された可能性が高い。

殿上人、「野辺に出でて虫を尋ぬ」と言ふ題、人に代はりて

43 ふりはへてたづぬる野辺の夕暮れは鈴虫の音ぞしるべなりける

【底本】

殿上人のへにいてゝむしをたつぬといふたい人にかはりて

ふりはへてたづぬるのへのゆふくれはすゝむしのねそしるへなりける

【通釈】

殿上人が、「野辺に出でて虫を尋ぬ」という題（を詠んだときに）、ある人に代わつて。

わざわざ訪れた（この素晴らしい）野辺の夕暮れは、鈴虫の音が道しるべであったのだなあ。

【参考歌】

故院の歌合に、「草むらの虫を尋ぬ」といふ題を

① おぼつかないづれなるらん虫の音をたづねば草の露や乱れん

（為頼集・七八）

② 草枕旅ねやせまし秋の野に人まつむしの声を尋ねて

（和歌一字抄・外・野外尋虫・八〇・源師時）

③ 夕されば秋の野風や寒からし機織る虫の急ぐなるかな

（和漢兼作集・秋上・野外尋虫・六一・平時範）

④ ふりはへてとはぬ鈴鹿の山路にいとどや冬はゆき隔つらん

（齋宮女御集・二二五）

⑤ ふりはへてとはんものとは思はねど耳のみとまる鈴鹿山かな

（紀伊集・一七）

⑥ 鈴鹿山ふりはへてゆく道よりや人の思ひのならんとすらん

（肥後集・一三四）

鈴虫の声を聞きてよめる 前大納言公任

⑦ 年へぬる秋にもあかず鈴虫のふりゆくまに声のまされば

返し 四条中宮

たづねくる人もあらなん年をへて我がふる里の鈴虫の声

（後拾遺集・秋上・二六八／二六九）

⑧ 紅葉をる野辺のたよりにくる人は松虫の音ぞしるべなりける

（元輔集・二四）

【語釈】

○殿上人、「野辺に出でて虫を尋ぬ」と言ふ題、人に代はりて：周防内侍に代作を頼んだ殿上人が誰であるかは不明。内侍という役職上、本集には殿上人や殿上の間とかかわる歌が散見され、本詠もそのひとつ。「殿上」は一九番【語釈】参照。和歌における「虫」は、おおよそ秋の虫のことで、虫の音を探し求める①のように、鳴く音について詠まれることが多い。「野辺に出でて虫を尋ぬ」という歌題はほかに残らないが、類似する題「野外尋虫」を詠んだ歌として、源師時の②と、本集に名が見える平時範の③がほぼ同時代に詠まれている。周防内侍はしばしば代作をしていて、本集にはほかに二七・七四・七七・八一番に代作歌がみえる。○ふりはへてたづぬる野辺の夕暮れは：「ふりはへて」は「振り延ぶ」（わざわざする）の連用形に接続助詞「て」をつけて副詞的に用いたもの。「振り」は「鈴」の縁語。「ふりはへて」と「鈴虫」をともに詠む例は周防内侍以前には残らないものの、「鈴鹿」と詠みあわせた例は④にある。また、④に影響を受けたと思われる⑤や⑥などが、周防内侍と同時代の女房歌人らによって詠まれている。初二句の詞づかいの近さから周防内侍も④に影響を受けたとみられるが、虫の題ということで「鈴鹿山」から「鈴虫」に変えた。○鈴虫の音ぞ：「鈴虫」は秋を

代表する虫の一つで、その名から「振る」や「鳴る」等とともに詠まれる。⑦の贈歌の「ふり」と答歌の「ふる」は、いずれも「鈴虫」の縁語。○しるべなりける：鈴虫の音に導かれて、素晴らしい夕景にたどり着いた感慨を歌う。松虫の鳴く声を、紅葉見物に行く野辺の道しるべとする⑧の下の句は、本詠と表現が重なる。

【補説】

四二・四三番が秋歌。続く四四番は季節を詠じたものではなく、冒頭から続いていた四季の歌のなかで、冬歌が欠けることになる。春から夏にかけての部分でも、歌合の歌がまとまって入っていたり、時系列が乱れている部分があり、四季歌の編集という点では未整理の感を免れない。

何となく心のうちも晴れ間なくのみ思ひ乱れて

44 求むれどありがたきかな憂き身には巖のなかも山のあなたも

【底本】

なにとなく心のうちもはれまなくのみおもひみたれて

もとむれとありかたきかなうき身にはいはほのなかも山のあなたも

【通釈】

なにということもなく心のなかも、空に晴れ間がないように思
い悩んで。

(どこに住処を) 求めたとしても生きにくいものですよ、つらいこ
との多い身には大きな岩のなかも山の向こうも。

【本歌】

み吉野の山のあなたに宿もがな世の憂きときの隠れ家にせむ

(古今集・雑下・九五〇・よみ人知らず)

いかならむ巖のなかに住まばかは世の憂きことの聞こえござらむ

(古今集・雑下・九五二・よみ人知らず)

【参考歌】

宮の宣旨殿の、年立ち返りてしるしも見えず晴れ間なきに、
九重はいぶせさもまさりて、などやうによみ給へりし御文、
とう失ひて忘れて、御返り事の限りおぼゆるぞあやしき、師
走に節分してしなり

(出羽弁集・九)

② 求むれど巖のなかのかたければ我もこの世になほこそは経れ

(和泉式部続集・二二四)

③ うきよには山のあなたのゆかしきに鹿のねながらいやはねらるる

(実方集・七八)

④ とちこもりいはほの中にいりしかど君がにほひは空にみえにき

(宇津保物語・吹きあげ下・四一八・忠こそ)

⑤ なべて世の憂くなる時は身隠さむ巖のなかの住みか求めて

(落窪物語・一〇・落窪の君)

【語釈】

○何となく心のうちも晴れ間なくのみ思ひ乱れて：「心のうちも晴
れ間なく」は、実際に曇った空を前にしつつ、その空のように私の
心も曇っていると、心のうちと眼前の空とを重ねる。①の詞書には、
空の晴れ間のないころに、気の晴れないようすを訴えた文が宮の宣
旨から送られてきたとあり、心持ちと天候が連動している。○求む
れどありがたきかな…：ここで求めているのは、下の句に示される憂
き世を逃れるための隠れ家。「堅き」は「巖」の縁語。二句切れ。
本詠の詞づかいは、恋人と思われる人が「世にて世ならぬ所をなむ
見て侘びたる」と言ってきたことに返した②に近い。○憂き身…：こ
こで歌われる「憂き」は、先にあげた本歌二首から取り入れたもの
で、俗世を生きるつらさを指す。○巖のなかも山のあなたも…：大き
な岩のなかにも山の向こうにも、安穩と過ごすことのできる隠れ家
は求めないことを歌う。「巖」は、大きな岩のこと。本歌として

あげた古今集歌二首は、いずれも浮き世から逃れる場所を求めていて、その具体的な場所として「山のあなた」と「巖のなか」があげられている。③はつらい世にあつては「山のあなた」が慕わしいと歌っていて、『古今集』九五〇番歌を下敷きにしている。「巖のなか」は、④で出家した身のこもる場所とされるほか、⑤でも「世の憂くなる時は身隠さむ」場所になつていて、俗世から切り離された隠れ所という感覚が定着していた。

【補説】

四四・四五番と雑歌が並ぶ。本詠がままたらない人生の嘆きを歌った述懐歌であるのに対し、次の四五番歌は天皇に近侍する殿上人と女房の日常を切り取った戯れの歌となつていて、明と暗のコントラストが鮮やかである。

昔の局の窓に、隆綱の宰相の中将、をかしよう結びたる御簾
をかけ給へりしを見て、蔵人ども隠し題にて歌詠みしに、
「局のぬしも詠め」と言ひしかば

45 たづねばや都のほかにやまとのみすぎむらありと人の言ひしを

【底本】

むかしのつほねのまとにたかつなのさい相の中将をかしようむす
ひたるみすをかけたまへりしをみてくら人もかくししたいをに
てうたよみしにつほねのぬしもよめといひしかば

たづねばやみやこのほかに山とのみすぎむらありと人のいひしを

【通釈】

かつての局の窓に、宰相中将の隆綱が、風情あるように（飾り紐を）結んだ御簾をお掛けになつたのを見て、蔵人たちが隠し題で歌を詠んだときに、「お部屋のあるじも詠んでください」と言つたので。

訪れて確かめてみたいものだなあ。都（の稲荷山）以外には、大和

（の国の三輪山）にばかり杉叢がある、と人が言うのを。

【参考歌】

三月廿日ころ、殿上人あまた局に来て物語りして夜ふくるま
であるに、郭公の鳴けば

①待つ人に語り伝へむ郭公まだ春ながら初音聞きつと

と言へば、師賢の弁

めづらしく鳴きて過ぐなる郭公いづこもこれや初音なるらん

（四条宮下野集・一七二／一七三）

②たづねばや誰もなげきをこりつめて胸にたく火の炎くらべを

（土御門院女房・二〇〇）

③すぎむらと言ひてしるしもなかりけり人もたづねぬ三輪の山もと

（後拾遺集・恋三・七三九・よみ人知らず）

④我が宿のまつはしるしもなかりけりすぎむらならば訪ね来なまし

（玄玄集・衛門六首赤染・一四〇〇）

桂のわたりに住み侍りける人の許にまかりて、古びたる橋の

もとにて、その心の歌よむべしと人人申せば

⑤昔より人の言ひこし津の国のながらの橋はこれにやあるらむ

（能宣集・四二九）

【語釈】

○昔の局の窓に：「窓」は三一番【語釈】参照。「局」は三九番【語釈】参照。①の詞書にある「局」には殿上人がつどつていて、本詠と状況が近い。詞書に「窓」が出てくるのは珍しい。○隆綱の宰相の中将：源隆綱（長久四年（一〇四三）〜承保元年（一〇七四）九月二六日 三三歳）は、父が源隆国、母は経頼女もしくは伊頼女。康平三年（一〇六〇）正月に蔵人。康平六年（一〇六三）四月に左権中将。治暦三年（一〇六七）二月に蔵人頭。治暦四年（一〇六八）四月に参議。治暦五年（一〇六九）二月に右近権中将。延久六年（一〇七四）六月に正三位。後三条天皇に文才を認められて、兄隆

俊とともに近臣として仕えた（古事談・後三条天皇、隆国の子息三人を召仕ふ事）。後冷泉天皇のときに殿上で歌を詠じている（新古今集・羈旅・九二二）。時期は不明ながら、歌合を主催したこと（夫木和歌抄・雑・一四五〇四）が歌書類にみえる。周防内侍のほかに、四条宮下野・康資王母といった女流歌人と交流があつた。『後拾遺集』・『新古今集』に各一首入集。隆綱が「宰相中将」と呼ばれるのは治暦四年から承保元年の没まで。○をかしよう結びたる御簾をかけ給へりしを見て、藏人ども隠し題をにて歌詠みしに、「局のぬしも詠め」と言ひしかば：「かくしたいにて」と書くべきところを誤り、「かくしたいを」と書いてしまったために「を」を見せ消ちで消してある。「隠し題」は、題の詞を内容と関わりなく歌の表面にあらわれないよう詠みこむことで、「物名」とも。どういう成りゆきでか、隆綱が周防内侍の局に洒落た御簾を掛けたことをきっかけに、藏人たちが当座に「窓の御簾」を隠し題として歌を詠んだ。ここでのやりとりは、天皇に近侍する殿上人や女房の日常の一コマを写し取つたもの。○たつねばや：初句にこの句を用いる歌は、周防内侍以降のものがほとんど。これを初句に置き、よく似た構成をとる歌としては、だれの胸で燃える嘆きの炎が激しいのを知りたいとする②がある。○都のほかにやまとのみすぎむらありと：都の稻荷山のほかに大和国の三輪山に「のみ」杉叢があると、いささか窮屈な限定がなされているのは、三・四句に「まとのみす（窓の御簾）」という隠し題を詠み入れようとしたため。和歌に詠まれる「杉叢」の多くは、著名な「しるしの杉」を念頭に置いたもの。本詠で詠まれている「杉叢」は、「都」のほうは山城国の伏見山、「大和」は大和国の三輪山をさして、杉叢の名所を我が目で確かめてみたいと歌う。音信のない男に対して、目印となる三輪山の杉の効果もなくあなたは来ないと詠む③や、私が待っていても来ないけれど稲荷の杉のあたりにならば訪ねていくのだろうと詠んだ④などに、杉むらをたず

ねる歌が残る。○人の言ひしを：倒置になつていて、「そのように言われているのは知っているが、実際にそうなのか確かめてみたいものだなあ」となる。長柄の橋と言われてきたのはこの橋のことか、と古びた橋をみて戯れた⑤に、類似する句がみえる。

【補説】

『十訓抄』十ノ三十二と『続古事談』卷二に、定文が秀逸であつたことから隆綱は中将と参議を兼ねることになつたと記されている。このように、隆綱は漢詩文について優れた能力を持ち、数は少ないながら当代の勅撰集である『後拾遺集』への入集も果たした才人であつた。

また、父隆国がもともと頼通の側近であつたにもかかわらず、隆綱とその兄弟たちはその才能ゆえに後三条天皇のもとで重用されている。隆綱自身は白河天皇の即位後一年で没しているものの、弟の俊明は白河天皇の退位後まで長く仕え続けた。俊明は周防内侍にとつて馴染み深い人物であつたと考えられ、その兄の行動を契機として詠んだ珍しい隠し題の歌が採録されたのであろう。

伊家の弁のめ、子うみてほどなく亡くなりけるに、遣りし

46 霜枯れの荻の上葉の末の露うしろめたくや思ひおきけん

【底本】

これいゝの弁のめこうみてほとなく／＼なりにけるにやりし

しもかれのをきのうはゝのすゑの露うしろめたくやおもひおきけん

【他出】

○『新後拾遺集』雑下・一四六〇

藤原伊家が女、子生みてほどなく失せぬと聞きて、遣はしける 周防内侍

霜枯れの荻の上葉の袖の露うしろめたくや思ひおきけん

【通釈】

伊家の弁の妻が、子を産んでまもなく亡くなったので、(周防内侍が歌を詠み)送った。

霜枯れた荻の上葉は葉末の露を気がかりに思つて心を残していたことでしょう。(亡くなられた奥様も、残していく幼子の行く末をどれほど気がかりに思い、心を残していたことでしょうかね)

【参考歌】

①もろともに秋をやしのぶ霜枯れの荻の上葉を照らす月かけ

(千載集・雑上・一〇二六・紀康宗)

②さりとともと思ひし人は音もせて荻の上葉に風ぞ吹くなる

(後拾遺集・秋上・三二二・三条小右近)

③末の露もとのしづくや世中の遅れ先立つためしなるらん

(新古今集・哀傷・七五七・僧正遍昭)

④秋はみな思ふことなき荻の葉も末たわむまで露は置くめり

(詞花集・雑上・三二〇・和泉式部)

⑤藤の花咲くを見捨ててゆく春はうしろめたくや思はざるらん

(金葉集初度本・春・二二九・中務)

⑥つづばかり頼むることもなきものをあやしや何に思ひおきけん

(拾遺集・恋一・六九〇・よみ人知らず)

【語釈】

○伊家の弁の妻、子うみてほどなく亡くなりけるに遣りし…伊家については二五番【語釈】参照。伊家の亡妻が誰であるかは不明。○霜枯れ…「霜」は、おもに秋・冬に水蒸気が氷となって地表を白く覆うことで、「霜枯れ」はその霜によって草木が枯れること。霜枯れた荻の上葉が詠まれる例は少なく、近い時代には、月の光に照らされた霜枯れの荻を詠んだ①がある。本詠では「霜枯れの荻」に、子を産んで亡くなった伊家の妻を重ねている。周防内侍はこれ以外にも「霜枯れ」を用いて子を産

して亡くなった母(四七番歌は藤原親子、六七番歌は中宮賢子)を表現している。○荻の上葉の末の露…「霜枯れの荻の上葉」を伊家の妻に喩えた上で、その葉の先においた儂い「露」を

生まれたばかりの子に喩える。露が置く葉はすでに枯れていて、ただでさえ儂い露の行く末が心にかかる。「荻」は二二番

【語釈】参照。「上葉」は、草や木の上のほうにある葉で、そこに置く「露」とともに詠まれることがしばしば。ほとんどが秋の草に用

いられ、なかでも「荻の上葉」の用例は多い。訪れてほしい人は音沙汰がなく、荻の上葉を吹きすぎる風ばかりが音を立てることを歌

う②はその一例。葉に置く露しづくの儂さに、人の命の儂さを重ねた③は『新古今集』哀傷部の巻頭歌として著名である。「末」は「本」

に対する言葉で、本詠のように物の先端や末端を指すときに用いる。また、「末」には子孫の意もあり、ここでも「末の露」に子どもを

重ねる。「露」は一四番【語釈】参照。「露」には「涙」が重ねられやすい。本詠にも「涙」が響いていて、露しげき景には、妻を失つた伊家や彼を気遣う周防内侍の嘆き、さらに我が子を残していく伊

家妻の悲嘆と、涙が幾重にも重ねられている。言い寄る男が自らの袖の露けさを歌って恋心を訴えたのに対して、④は物思いをしない

荻の葉さえ末がたわむほど露が置いていると反駁する。○うしろめたくや…霜枯れの葉が葉末の露を気がかりに思うように、亡き奥方は

生んだばかりの子供のことが気がかりであろうと歌う。⑤では、藤の花を見捨てていく春は、花を気がかりには思わないのだろうか

と推し量る。○思ひおきけん…「思ひ置く」はあとに心を残すこと。贈歌で逢えないことを歎く男に對し、⑥はまったくそのような関係

でないのにおかしいこと、何に思いを残していたのかと拒絶する。「置く」は「露」の縁語。

【補説】

四六・四七番歌と、子どもを残して死去した母を主題とする哀傷

歌が並ぶ。

十月廿余日に、二位の失せ給へりしを、ほど過ぎて修理の
大夫に聞こえし

47 言ひやらん言の葉だにぞなかりける霜枯れはてし頃の別れは

【底本】

十月廿よ日に二位のうせたまへりしをほとすきてすりのたいふ
にきこえし

いひやらんことのはたにそなかりけるしもかれはてしころのわか
れは

【他出】

○『続後拾遺集』哀傷・一二五八

神無月の廿日余りの頃、美作三位思ひにて侍りけるに、
ほどへて言ひ遣はしける 周防内侍

言ひやらん言の葉だにぞなかりける霜枯れ果てしころの別れは
○『万代和歌集』雑五・三四八二

十月廿日余りの頃、美作三位思ひにて侍りけるを、ほど
へて言ひ遣はしける 周防内侍

【通釈】

（寛治七年）十月二十日過ぎに、二位（藤原親子）が亡くなら
れたので、しばらくしてから修理大夫（顕季）にお便りをさし
上げた。

言ひ送るべき言葉さえもありませんでしたよ。霜で（葉が）すつか
り枯れはてた頃の（お母さまとの）お別れには。

【参考歌】

①言ひやらむ方も知られず君がため千松の原のゆづる齢は（大嘗
会悠紀主基和歌・後一条院長和五年十一月二日・御屏風歌六帖・

二七二・大中臣輔親）

男の病に患ひて、まからで久しくありて遣はしける

今までも消えて有りつる露の身はおくべき宿のあればなりけり
返し

②言の葉もみな霜枯れに成りゆくは露の宿りもあらじとぞ思ふ

（後撰集・恋五・九二二／九二三）

子に遅れて嘆きける頃、輔親もとへ申し遣はしける 重之

③言の葉に言ひおく露もなかりけりしのび草にはねをのみぞなく

（新拾遺集・哀傷・八四八）

【語釈】

○十月廿余日に、二位の失せ給へりしを…「二位」は藤原親子のこ

とで、寛治七年（一〇九三）一〇月二日に七三歳で薨じた。『中

右記』寛治七年一〇月四日条・一〇日条には重病になった親子を白
河上皇が見舞った記録がみえ、さらに一〇月二日条に他界したこ

とが記されている。【補説】参照。「二位」については二番【語釈】
参照。○修理の大夫：藤原顕季（天喜三年（一〇五五）～保安四

年（一一二三）九月六日 六九歳）は、父が正四位下美濃守藤原隆
経、母は藤原親子。六条修理大夫とも。母が白河天皇の乳母であつ

たことから院の近臣として活躍し、院の別当をつとめた。延久四
年（一〇七二）一二月に蔵人。寛治四年（一〇九〇）八月に伊予守。

寛治八年（一〇九四）八月には修理大夫。天仁元年（一一〇八）に
正三位。天永二年（一一一一）正月に太宰大式。歌道家の六条藤家

の祖とされる。『詞花集』撰者の顕輔は息子。清輔は孫。顕昭は養
子。承暦二年（一〇七八）四月の『内裏歌合』、寛治七年五月の『郁

芳門院根合』、永久四年（一一一六）四月の『鳥羽殿北面歌合』、『堀
河百首』といった数々の歌会歌合に出詠した。元永二年（一一一九）

の『内大臣家歌合』では判者をつとめるなど、歌壇の中心人物とし
て活動。元永元年（一一一八）に、はじめて人丸影供を行った。『後

拾遺集』以降の勅撰集に五七首入集。家集は『六条修理大夫集』
 ○言ひやらん言の葉だにぞなかりける…母を亡くしたあなたのつら
 さを思うと、言い送る「言の葉」すら見つかからないという心のうちを、
 霜枯れの頃に葉が失われることと重ねて詠じた。「葉」は「霜枯れ」
 の縁語。「言ひやらむ」と初句に置く先行例は少なく、大嘗会和歌
 として詠まれた①など数首が残るのみ。②は男から音信（言葉）が
 なくなることを、葉が霜枯れて失われることに喩えている。③では、
 子に先立たれた重之がただ泣くばかりで言葉もないと歌う。○霜枯
 れはてし頃の別れは…「枯れ」に「離れ」を響かせ、親子が薨じた
 一〇月二一日頃の季節にあわせている。「霜枯れ」は四六番【語釈】
 参照。

【補説】

『中右記』には、いよいよ病の重くなった乳母を足繁く見舞い、
 その死を嘆く白河院のようすが『中右記』に記されている。

▽寛治七年十月四日条

上皇俄有御而白河、前驅四五人許云云、是御乳母二位同着之所
 勞頗以危急也、月東在白河私堂、及深更還御云云

▽寛治七年十月十日条

上皇俄有御幸白河、是依御乳母二位所脳危急也、

▽寛治七年十月二十一日条

廿一日、今朝従二位藤原朝臣親子薨、年七十三云云、

親子者、故大舍人頭親国朝臣之女、当時伊予守頭季朝臣母、
 太上天皇唯一之御乳母也、上皇在位之時浴天恩、従五位下
 昇正三位、当今有行幸仙院之次、進爵叙従二位、先落飾為尼、
 法勝寺之東南辺占吉土建立堂舎、偏事念仏、薰修積年、而此
 一月許已臥病席、依之上皇頻密密有御幸、今朝已逝去、現同
 二世相叶之人也、上皇御愁歎殊深云云

昔の殿上人の人人、「うつほはしら」を隠し題に詠みて、「詠
 め」と言ひしに

48 夜もすがら衣うつをばしら浪のたつかとよそに聞きあかすかな

【底本】

むかしの殿上人の人／＼うつほはしらをかくしたいによみてよ
 めといひしかは

よもすからころもうつをはしらなみのたつかとよそにきゝあかすか
 な

【他出】

○『夫木和歌抄』秋五・五七九五

夜もすがら衣うつをばしら浪の立つかとよそに聞きあかすかな

この歌は、殿上人の人人、雨降る日、「うつをばしら」を
 隠し題に詠みけるに詠めると云云

【通釈】

昔、殿上の方に参仕していた人々が、「うつほはしら」を隠し
 題にして歌を詠んで、「(あなたも)詠んでください」と言った
 ときに。

一晚中ずつと衣を打っていることを知らずに、白浪が立っているの
 かと、よそごとに聞いて夜を明かしましたよ。

【参考歌】

①夜もすがらこれは何ぞと唐衣うつをばしらで目をさましける

(隆信集・うつをはしら・四二七)

②しのぶわけてうつほ柱にかくる日はもるてふ水のくちやなからむ

(新撰和歌六帖・言はで思ふ・一三七九・藤原信実)

③むなしてふうつほ柱に隠れじやなほ九重に面影ぞたつ

(草根集・寄柱恋・八一三三)

④網代木に氷魚のよるをばしら浪の洗へどきえぬ雪とこそみれ

(祿子内親王家歌合承暦二年・網代・二番左・三・美作)

⑤八月九月正長夜 千声万声無了時

（和漢朗詠集・擣衣・三四五・白楽天）
⑥唐衣長き夜すがら打つ声に我さへねでもあかしつるかな

（後拾遺集・秋下・三三五・源資綱）
⑦寝覚めする身を吹きとほす風の音に昔は袖のよそに聞きけん

（新古今集・哀傷・七八三・和泉式部）

【語釈】

○「うつほはしら」を隠し題に詠みて…兩種の機能をもつ「うつほはしら」を題としてることから、『夫木和歌抄』の左注は「雨降る日」としたか、あるいは、現存しない資料に拠って当日の天候を記したか、詳細は不明。同時代に、同じ隠し題で詠まれた歌はほかに残っていない。後代に「うつほはしら」を隠し題として詠んだ①は、砧の音を聞き分けることができず何だろうと目をさましたと歌っていて、本詠を参考としたか。「空柱（うつほはしら・うつおはしら）」は、中がうつろになっていく柱のこと。雨水を落とす箱形の縦樋など、柱に穴を通したものを指す。たてどい、はこどい、とも。特に、清涼殿の殿上の間の東面南端にある雨落ちの柱を「空柱」という。『百鍊抄』承安元年（一一七一）二月一日条に「弓場始之間、立明火烧付宇津保柱、頼政朝臣撲滅之」との記述がある。「うつほはしら」が歌に詠まれることは少なく、秘めた恋を歌う場面で「うつほはしら」を用いた②や、内裏の「うつほはしら」にからめて恋を歌った③がある。「隠し題」については四五番【語釈】参照。○「詠め」と言ひしに…詞書の末尾部分の「かは」を見せ消ちにして「に」に訂正している。殿上人たちが、周防内侍に「あなたも『うつほはしら』を隠し題にした歌を詠んでください」と言ったことからこの歌が生まれた。四五番歌で、藏人たちから「まとのみす（窓の御簾）」という隠し題を詠むように求められたのと類似する状況。○夜もすがら衣つつをばしら浪のたつかと…衣を打つのを「知ら」ずと、「白

波」が掛詞。本詠と同時代に詠まれた④で、氷魚が寄ってきたとは知らないで白波が洗っても消えない雪だとみていたと歌う。「衣打つ」は「擣衣」のことで、砧に載せた布を槌で打って、布につやを出して柔らかくすること。李白の『子夜呉歌』など漢詩文の影響によって、秋から冬にかけての孤閨の寂寥を喚起させる題材であった。この「衣打つ」音は、八月九月の長夜には一晩中衣を打つ音が響くと⑤の漢詩で歌われたり、『後拾遺集』秋下の巻頭歌⑥でも衣を打つ音のために寝られないまま夜を明かしたと詠まれていて、一晩中やむことのない音が人の注意を引いた。ただし、砧の音を波の音に聞き違える例は、周防内侍と同時代やそれ以前には見えない。珍しい表現は、二・三句に隠し題「うつほはしら」を詠み入れていることが影響しているか。「裁つ」は「衣」の縁語。○よそに聞きあかすかな…砧の音を自分には遠いものとして聞きあかすあるので、孤閨を歎く女の嘆きを余所ごととする薄情な男をよそおい、隠し題を詠む男性官人らに混じってみせたか。「よそに」は、擣衣の音は空間的にも心理的にも隔たるものであったことを示す。和泉式部は為尊親王に先立たれた頃に詠んだ⑦で、ひとり寝の身を吹きすぎる風の音を、あのかたと共にいた昔は自分に関わりないものと聞いたのだろうとする。

【補説】

四五番歌と同じく、隠し題の歌を廷臣や女房が日常的に楽しんでいたことが本詠からもみてとれる。四五番歌の詞書が「昔の局の窓に」からはじまったように、本詠も「昔の殿上人の人人」とあるので、あるいは、こちらも後三条天皇の御代あたりを回想したものか。そのように考えることが可能であれば、隠し題の歌二首の間に哀傷歌が挟まれているのは配列上収まりが悪く未整理といえる。

石山より帰るとて、鏡山を見やりて

49 大空もかき曇れかし鏡山うき身の影の見えもこそすれ

【底本】

いしやまよりかへるとてかゝみ山をみやりて

おほそらもかきくもれかしかゝみ山うきみのかけのみえもこそすれ

【他出】

○『万代和歌集』雑三・三二二六

石山より出づとて、鏡山を見て 周防内侍

大空もかき曇れかし鏡山うき身の影の見えもこそすれ

【通釈】

石山寺から帰るといふことで、(その帰り道に)鏡山を見て。

(鏡を曇らせるように)大空も一面に曇っておくれ。(鏡の名をもつ)

鏡山につらい私の姿があらわれてしまうかもしれないから。

【参考歌】

❶鏡山いざ立ちよりて見てゆかむ年へぬる身は老いやしぬると

(古今集・雑上・八九九・よみ人知らず *仮名序にも)

❷鏡山山かき雲り時雨のれど紅葉あかくぞ秋は見えける

(後撰集・秋下・三九三・素性法師)

❸鏡山こゆる今日しも春雨のかき曇りやは降るべかりける

(後拾遺集・羈旅・五一〇・惠慶法師)

❹老の後うつらむ影もはづかしく鏡の山の月を見つる夜

(為仲集・一二九)

❺うちとけてよのつねならぬあふことを夢にも人に見えもこそすれ

(大式高遠集・一二六)

【語釈】

○石山より帰るとて、鏡山を見やりて…本詠は石山詣での帰り道での歌であるが、周防内侍が石山詣でをした時期は不明。「石山」は現在の滋賀県大津市にある石山寺のこと。「石山寺」は真言宗の寺

で山号は石光山。京に近い観音信仰の霊地として、貴顕の参詣がしばしばあった。『石山寺年代記録』延喜一七年(九一七)九月二〇日条は、参詣の嚆矢を宇多法皇とする。石山寺は文学作品にもしばしば姿を見せ、『蜻蛉日記』や『和泉式部日記』、『更級日記』などに石山参詣のことがみえるほか、『枕草子』の「寺は」にも名がみえる。時代が下ると、石山寺で琵琶湖にかかる月を見つづ紫式部が『源氏物語』の須磨・明石の巻を執筆したとする伝承(河海抄)もみえる。石山寺は承暦二年(一〇七八)一月に大火災にあい焼亡、永長元年(一〇九六)に本堂が再建されている。周防内侍が参詣したのは、この焼亡の期間を除いたどこかということになる。「鏡山」は滋賀県野洲町と竜王町の境あたりにある山々のこと。古くから近江国の歌枕とされ、のちには大嘗会和歌や建保三年(一二二五)『内裏名所百首』の歌題とされた。鏡山に立ち寄って、年を経た身が老いたか見てみようと思つた①のように、歌枕の「鏡山」に姿をうつす「鏡」を掛けて詠まれることも多い。○大空もかき曇れかし…山の名前をきつかけとして、鏡が曇るように大空も一面に曇れと歌う二句切れ。「かき曇る」は、雲や霧などによって空が一面に曇ること。本詠はこれに鏡が「曇る」ことを重ねる。鏡山の空がかき曇る歌として②や③などが本詠に先行する。「曇れ」は「鏡」の縁語。○うき身のかけの…「憂き身」が具体的にどのような状況を指すのかわ不明だが、①や、月の光に老いた姿があらわになることを気恥ずかしく思う④にみられるように、老いた姿が鏡に映る歌が散見されるので、ここでも老いを厭う心を示したと考へ得る。ここでの「影」は姿や形のこと。○見えもこそすれ…第四句に歌われている「うき身のかげ」が、周りにはつきりと見えてしまうことをつらく思う。高遠と密通した武士の妻が、ほんのわずかでも二人の仲が他人に露見したら大変だと⑤で詠む。

【補説】

本詠を単に自らの老いを歌うものとするならば、五〇番歌以降しばらく恋歌が続いていくので、四九番歌と同じく配列の未整理を感じさせる歌となる。

しかし、同時代あたりには

恋すればうき身さへこそをしまるれ同じ世にだにすまむと思へば
（詞花集・恋上・二二四・心覚法師）

というように、恋と憂き身が結びつく歌もある。

本詠に続く五一番は、「年ごろつねにある人の、ほかにありしかば」という詞書を付して男に忘れられた女の恨みを歌っている。直前に五〇番歌を置くことで、長くともに過ごした男の仕打ちを嘆く女に、鏡に映ることを厭う老いた姿を重ねようとしたか。

〔付記〕 翻刻を許可してくださった 公益財団法人 冷泉家時雨亭
 文庫に深謝申し上げます。